Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-18

田村俊子「炮烙の刑」論 : 女主人公が求める「奇蹟」

高田, 晴美

(Citation)
国文学研究ノート,39:13-25

(Issue Date)
2005-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012360

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012360

田村俊子「炮烙の刑」論
――女主人公が求める「奇蹟」――

高田晴美

はじめに

田村俊子のいわゆる〈両性の相剋〉物と称される作品群を、長谷川啓は「女性の新しい自我のかたち」の追求がテーマだとし、さらに「彼女のフェミニズム意識が最高度に噴出した」作品の頂点として「炮烙の刑」(『中央公論』大正三・四)をあげている。[1] 女主人公をとりまく人間関係のモチーフとしては、面識はないが自分のことを慕っている青年との手紙のやり取りに関して夫と言い合いになった後、青年のことを「目の覚めるやうな美しい男であればいゝ」と考えた「魔」(『早稲田文学』明治四十五・二)の女主人公のその後を描いた感のある作品である。ここでは、女主人公は現実にもある青年と密会する関係にまで発展しており、「口づけ」までしたことが夫にばれて激しい争いをした後の男女の様が描かれている。鈴木正和が言うように、「夫婦の確執の事件的発端が、「妻が他の男の顔をみて、顔を赤くしたかもしれない」(「誓言」)というあいまいな疑惑から、妻が「若い恋人」と「口づけ」をしたことを夫に知られてしまうという「炮烙の刑」の具体的な事実へ」[2](傍点筆者。なお「誓言」は『新潮』明治四十五・五)と夫婦の闘争がより現実的なものへと強調されたと言える。「魔」や「誓言」での闘争する夫婦関係を、妻の浮気という現実問題を加えることでさらに突き詰めようとしたのが「炮烙の刑」である。

それまでの〈相剋〉物が作品の途中に修羅場を配して争う男女を描いていたのに対し、「炮烙の刑」は冒頭以前と結末以後の二度の修羅場に挟まれた部分を描いている。その間の女の刻々と移りゆく心情を見るに、この作品は偶発的に争う男女の有様ではなく、〈相剋〉を志向する女の内実に重きをおいていると言ってよい。焦点は争いになってしまう状況にあるのではなく、〈相剋〉を迎えんとする女の思惑の方にあるのではないか。

多くの論者が指摘するように、〈相剋〉物には確かにフェミニズム意識を窺うことができ、男に反抗せざるを得ない状況の糾弾や、反抗という女の欲望とそれを達成した時の充足感にも似た快感が読み取れる。しかし、結婚制度を解体し、いわゆる女の自我を主張してフェミニズム意識を押し出すことが俊子や

女主人公の真の目的であり願望なのだろうか。そうだとしても、多くの同時代人の、女主人公は旧思想から脱しきれておらず、思想も無自覚で不徹底とする批判[3]は田村俊子という作家に対しては的外れの感が否めないが、しかし、女主人公たちが心から欲しているものはそのようなものなのか。

「炮烙の刑」の結末部を見てみよう。女（龍子）が家を出て行った夫（慶次）を関係修復を図って追いかけておきながら冷たくも男を残して一人東京に戻った翌日、女のもとを浮気相手の青年が訪れる。その青年を送りに外に出て二人で話していたところを、旅先から帰ってきた夫に目撃される。青年をその儘残して女が家に向かうと、道の角に夫が立っていた。そして、男の「殺気を含んだその眼」にぶつかり、腕を捕まれる。

「汝が云つた通りに焼き殺してやる。」

慶次はうめくやうに低く云つた。その息が大きく弾んでゐた。龍子は黙つて引きずられて行つた。恐怖が全身を襲つたけれども、龍子は非常な力でそれを押さへつけた。

「どんな目にも逢ひます。逢はしてごらんなさい。」

自分の人生にも斯ういふ奇蹟がおこるのだ。――龍子は冷嘲的に然う思ひながら空を見た。青い空は幸福に輝いてゐた。

この「奇蹟」とは一体何なのか。平塚らいてうはこれについて「私には何のことだか分らない[4]」と言っている。恋愛も自己を完成させるための手段であり、自分の思想を透徹させることが第一だったらいてうには、中途半端に自由恋愛を遂行する龍子は無自覚で内省不足にしか見えない。思想で見てしまう人には分からないのも当然だろう。

鈴木正和[5]は、主人公が「必死にもがき求め得ようとしていたものは、〈恋愛〉そのものの獲得というよりも、むしろ他者によって占有されることのない〈個人〉としての〈自己〉の獲得、つまりは本当に自分が自分であることの出来る「自分の戀」が成立する以前の自由な内面的土壌の形成」（傍点筆者）であるとする。故に「炮烙の刑」を「〈結婚〉という制度によって占有された不安定な自己から、たとえ〈火油りの刑〉にされても、自己を主張し、肯定する主人公を描き出すことによって、〈個人〉としての解き放たれた〈自己〉を、壮絶な内的葛藤を経て決死の思いで獲得しようとした、一女性の意識的変遷のあり様を描いた作品」であり、「〈家制度〉や〈家父長制〉が持たらした〈個〉の生き方を阻害する結婚制度そのものの弊害を処罰するための方向性を内に秘めたテクスト」と捉えている。そして結末の「奇蹟」は「龍子の内面的な〈自己獲得〉という大きな『奇蹟』」であると論じている。

〈相剋〉物の女たちが誰にも抑圧されない個を希求しているのは確かである。しかしそこから前提として女＝〈抑圧される存在〉とし、反抗は男や制度に対する処罰と考えるのは、逆に女を男や制度に縛られ反抗することでしか解放されない被抑圧的弱者とみなすことにも繋がり、これは俊子作品の女達には「侮蔑」と受け取られかねない。女は自己獲得を目指す、つまりまだそれができていない存在なのか。俊子作品の場合、その

前提が疑わしい。実際には抑圧を感じ、それに反抗しているのではあるが、あえて自分＝〈抑圧されない存在〉であると強調した上で、男を抑圧者という点以外の面においても断じているのではないか。男に望んでいることは、女の個を抑圧せぬことの他にももっと重要なことがあるのだ。

女が真に欲するものが個としての自己ならば、男と別れてしまえばいい。野上弥生子も「女主人公にインテレクチュワルな方面が多分に存するならば、彼女の今までのところ唯一な仕事となつてるらしい恋愛関係の紛糾などは、容易に解決されるものだと思はれます[6]」と言っているように、理性的解決は不可能ではない。実際、龍子自身も慶次を追う際中、「自分は慶次から離れて、いつたん自分のやつた行為のまゝに、明らかに自分の境涯を導いて行くのがほんとうではないか」と自問するくらいだ。男や制度からの解放を望む気持ちも多分にある。それでも女は解決を目指さない。自分の言い分を男が受け入れることはあり得ないと想像できる状況で、離別も謝罪も考えない。つまり解決が女の目的ではないのである。むしろ解決を避けている。男の意に沿わないのは自己獲得という点からでも理解可能だが、必要以上に自分を男に対立する存在として見せつけようとする態度は、単なる自我の主張を超えるものがあることを思わせる。個への希求と言うだけでははみ出してしまう欲望が女に見え隠れする。女が解決を避けるのは、女側の問題ではなく、男に突きつけたい何らかの思いがあるからなのだ。

一方、「自我の解放」などのタームで語ることに限界を感じている論者もいる。光石亜由美は「炮烙の刑」結末部について、『『焼き殺してやる。』という生々しい呻き声は、慶次の夫としてのプライド（慶次の手紙によく表れている）が龍子の意志のまえに瓦解し、彼が夫の役割から、男と女の〈欲望〉が交差する舞台にまで引きずり出たことを告げる。そして、同時に性・言語・ジェンダーという男性中心のシステムから、新しい男女の関係、対話の舞台へと移行した『奇跡』でもある」と述べている[7]。これは本論文の論旨に近いところもあるのだが、この考え方には根底に、女の闘争の対象として、女と対立し服従させる男性原理が支配する制度があると思われる。そして、女がその制度に加入できない除外者だからこそ、制度や男を憎悪し、解体しようとしているということになろうか。しかし、女が憎むのはそんなシステムの中にいる男というものなのだろうか。制度などという外圧的、無機的な要素を考慮するでなく希求する男女の対のあり方というものが女の中に見えないか。結論を先に言えば、女が真に憎悪するのは制度やそこにいる男ではなく、自分の欲する対関係に加担しない、対に相応しくない男なのだ。

結末部を素直に読めば、「奇蹟」とは女に「炮烙の刑」がもたらされることに間違いない。「奇蹟」と称してしまうほど女はそれを渇望していたのだ。では、女が欲する「炮烙の刑」とは何なのか。女は何を望み、何を男に突きつけているのか。フェミニズム意識とは別の観点から女の欲望を探りたい。

一、〈女ー男〉という対へのこだわり

「炮烙の刑」の登場人物は、主人公龍子と夫慶次、浮気相手の青年宏三の三人である。設定を見ると主人公をめぐる三角関係の話かのように思われるが、この三人は決して三角関係なのではない。少なくとも女にとっては、中心となる〈龍子ー慶次〉と〈龍子ー宏三〉という無関係の二つの対が主人公を基点に形成されていると思われる。「あの青年を愛すのも、慶次を愛すのもそれは私の意志ではないか」「私の為たことは私の為たことだ」「あの行為も、私の男へ対する愛も、みんな私のもの」等の「私」を強調する言葉は、女の自我の主張というだけでなく、二つの対はお互い無関係で、男たちの相手は自分だけなのであり、男たちが自分の所属する対を逸脱することは許さないとする心情の表れとも捉えられるからだ。女の心積もりでは、慶次と宏三の間には何ら結びつきはないのだ。性質の違う二つの恋愛を独立に成立させていたのであり、それをひっくるめた複雑な人間模様を織り成していこうという気はない。それぞれが全く関与し合わない別物なのだ。だからこそ、慶次が龍子と宏三の関係について口出しすることは許されないのである。慶次が女を責めることは、女自身のことに何の権限も持つはずのない夫による個としての女への侵略であるだけでなく、夫婦という対を崩し逸脱する行為だからこそ、龍子は慶次の口出しを認めなかった。慶次は自分と龍子の対のことだけを考えていればよいのである。

そもそも龍子にとって宏三との関係は所詮「いたづら」なのだ。慶次との間ではもう味わえない恋の情緒を満たす為のものに過ぎない。人生や生き方を揺るがすような重大なものではない。他作品になるが、「炮烙の刑」の後日譚のような「奴隷」（『中央公論』大正三・七）では、女は夫に青年との浮気のことを「どんな場合にも私は唯恋のシーンを楽しんだだけです」「私はどんな場合にも、男を美しい人形だと思つて見てゐたんですからね」と言いきる。三角関係になるべき男として青年を見ることなど女にはありえない。あえて三角関係的に男達を見るなら、当初女が「いたづら」として楽しんだ時期は二人の男は全くの無関係だが、慶次に関係を知られてからの宏三に関してなら、龍子と慶次という対をより壮絶で分かち難いつながりへと導くための当て馬としての役割を充てられたと見るべきだろう。

従って龍子は宏三に対しても、龍子夫婦の関係に介入することを許さない。龍子が東京に戻った翌日、宏三は龍子を訪問するが、龍子は宏三の甘えるような態度にも反応せずそっけない。慶次との闘争にどっぷり浸かろうとしているところなのであるからそれも当然だ。当て馬としての宏三の役割は果たされており、もはや不必要なのだ。今更「いたづら」を続ける気分になろうはずもない。だから宏三に別れを告げるのだが、宏三はそんな女の状況など知る由もない。自分は龍子と神聖な恋愛をしているつもりであり、龍子を「殺す」と言った慶次という「恐ろしい悪魔の手が、自分の為にこの龍子の上に覆ひかからうと

は」と、自分等を悲劇の真っ只中にいる男女のつもりでいる。そして龍子に「私は覚悟してゐるのです。私はもう親も家も思ひはしません。私はあなたの思ひ通りになります。あなたにはなれるのはいやです」「到底二たつの道を同時にいらつしやる訳には行かない。どつちかを取らなければ」と訴えかけ、龍子が「自分の手に逃れて来てくれる」ことを望み、それによって「この恋は一層濃く強く実際的に結ばれるのだと思つた」。宏三は女を慶次と取り合っている気なのであり、女も自分と慶次の間で心が揺れている、つまり夫婦関係と張り合えるほどに自分らの関係が女にとっても重大なものであると過信していた。しかしこれは自惚れであった。女はそんなことは考えもしない。こうなると宏三は女にとって「煩い」存在でしかない。しかし情にもろい女であるので、宏三の哀れさには心が惹きつけられたりもする。それでも女には絶対に許せないことがある。それは宏三が自分と慶次との対に介入しようとすることだ。夫婦関係に自分も関与していると自惚れていること自体が許せない。龍子が宏三と話しているところを旅先から戻った慶次が目撃して去っていったので、宏三は女を守るナイト気取りで「私は野代さん（慶次のこと。引用者注）にお目にかゝります」と決心したように女に言うが、この言葉に女は「僭越の意味の侮辱」を感じて不快になる。夫婦の対にとっては部外者である宏三には、夫婦の問題に口を挟む資格は元よりないのである。宏三が慶次と顔を合わせる、つまり女と慶次との仲に介入し、ましてや女の代弁者・先導者の如く主導権を握るなどもってのほか、「僭越」以外の何ものでもない。それは女の個としての自我を犯すという点でも許し難かろうし、何より、夫婦の対をよそ者が乱すという点でも許しておけないに違いない。

このように龍子は、慶次が夫婦の対以外のことに口出しして対を逸脱することを認めず、宏三に対しても夫婦関係に介入することを許さない。これは女が個を希求している為と言うよりはむしろ、自分と慶次との〈女－男〉の対にこだわっている為だと思われる。女は、浮気をして夫以外の男とも対を作ってはいても、根本的には夫である慶次しか見ていないのだ。

更に女は、対へのこだわりを自分だけが持っていることにも我慢ならない。慶次が自分と宏三とのことに口出しするのは、対からの逸脱というだけでなく、自分たち夫婦の対に対する執着の弱さととるのである。女はそこも責めているのだ。

勿論、個としての自己獲得は当然として、そんな個である男女が一対一で向き合う関係を龍子は模索している。このような闘争に対するとりくみ方は女の一方通行になりがちだ。しかし、双方向でないと〈相剋〉は成り立たない。だから、対に対する執着、自分という存在の相手へのぶつけ方が自分からだけの一方的なものでなく、同質のものを男からも返してくることを女は望んでいるのだ。これを達成して「奇蹟」とも言える真の〈相剋〉を成立させるために、女は何人からも隔絶された二人だけからなる対に執着し、作り上げていこうとする。そして男をも対に執着させようと画策する。では、女が望むような、対に執着する男とは、どのような存在だろう。

二、「殺せ」という言葉に込めた女の心情

「炮烙の刑」を受けるということは、男に殺されるということである。これに関連して「炮烙の刑」では、第一章の女の「殺されよう」、第五章で男に突きつける「焼き殺して下さい」、結末部の男の「焼き殺してやる」とそれに返す女の「どんな目にでも逢ひます。逢はしてごらんなさい」など、途中何度も「殺す」類の言葉が女によって、そしてそれを受けた男によって使われる。これらの言葉にはどのような違いがあるのだろうか。

冒頭、修羅場の翌朝目覚めた女は、男がこれから自分を殺そうとしていると思い込み、恐怖から逃げようとしたが、「懲罰的な侮辱」を男に与えられたことを思い出すにつれ再び男への憎悪の念がつのり、「罪悪ぢやない。決して私はあやまらない。私はあなたに殺される。殺してください。殺してください」と「男の怒りの前に身體を抛り付けたあの反抗」が心に兆す。この「殺される」という言葉は、「何故私は男の怒りを受けて殺されなければならないのだらう」という理不尽な思いを抱えながらも男に反抗すること自体を第一とする心からきているものである。だから「私は死ぬまで彼男を毒突いてやる。悪態を吐く。然うして殺されやう」と思うのだ。自分を侮辱する憎むべき男には反抗してみせなければならない。しかし、これは何かを覚悟しての態度ではない。だから男に対する恐怖はまだ拭えず、また逃げようともする。

では第五章、旅先で男と対峙した際の女の言葉はどうか。第一章の「殺されやう」は男が自分を殺そうとしているという思いこみの下に出た言葉だ。「いつ、突然に慶次が眼の前に現はれても、それに対抗のできるやうな不貞腐れた強い意地」で侮辱を跳ね返す為の反抗なのだ。その反抗心も家出した男が残した哀れな手紙によってあっさり鎮まり、情にほだされ男を追いかけていく。だが、いざ男に会うと「一と言物を云ひ交はしたその時から、もう慶次に対する一種の反抗的な感情」が兆し、しかし同時に「戀ひしく」「肉に甘へた感情」も抱く。一方男は、自分を追いかけておきながら謝罪の言葉もない女に次第に怒りと憎悪が再燃して、問題解決の為には女の謝罪か離別しかないと考える。それに対して女は「別れるのはいや」と泣きながら感情的に言いつのる。しかし女は自分の声が「他人の聲のやうな気がして」「突然、はげしい力で彼女の肉の上にある感覚がおそつてき」、男が女と別れて二度と会うまいと思っていたという言葉を聞いて爆発したように出るのが次の言葉である。

「私を殺さうと云つたぢやありませんか。何故然うしないんです。そんな事を思ふなら殺して下さい。殺しちまつて下さい。私はまだその方がいゝ。あなたに殺されるか、もつとそれよりも酷い目に逢はしてもらつた方がいゝ、もうこの上もない惨虐な目に——」

ここで女の心情に憤りへの転換が起こっている。転換を促したのは男が女を前にしても対処として離別を考えたことであるが、決定的に女を変えたのは、男の「お前は考へて云つてゐる

のか。考へなしに云つてゐるのか」という言葉だろう。女は青年との浮気問題は念頭に置かずに男との情緒的なやり取りによって夫婦関係を保とうとしたのに、男はそれを汲まず、あくまで問題解決を第一とし、女が謝罪しないなら別れることで事態の消極的解決をするしかないとする。そしてそれをきかない女を「考へなし」と言うのだ。結局は自分の行為を罪悪と思わない女に対して謝罪を要求しているのである。しかしそれはかなわないと分かっている男は、女が執着する夫婦という対から抜け出そうとしているのだ。そして、問題は理性的な自分ではなく「考へなし」の女にあるのだと女を侮蔑し、問題の全てを女に帰しているのである。男にそのような態度に出られた為に、女の心情は憤りへと転じた。自分が男に対してとるべきは哀れに言いつのることではなく、問題を男に帰し返すことだ、と。それで先程の「私を殺さうと云つたぢやありませんか」という男への詰りとなったのである。女は自分たち夫婦の対における問題は自分よりむしろ男にあると突きつけているのだ。第一章の「殺されやう」は女の反抗の意志の表れであった。これは女自身の心構えの問題であった。そして男との対峙に至って、「殺せ」と男に迫ることで、問題は男にあると男に提示したのである。

女はこのような心情で「自分の肉全體を燃え上る火の中に抛り込んでもらひ度いやうに肉が苛れ」、「焼き殺して下さい」と言って自分の身体を男に「突きつけて」「摺りつけた」。だが、女がここまでしたにもかかわらず、男は不甲斐無く「僕には分らない」と言うだけであった。だから女は「心がすつと冷めたく明らかに」なって男を「侮蔑」する。

「あなたにどんな目にでも逢ひませうよ。あなたの好きにして下さい。私の爲た事があなたにそんな苦痛を與へたといふなら、あなたからどんな復讐でも受けませう。好きにして下さい。私は決して後悔してはゐないんです。自分の爲た事を。」

と自分への復讐を唆すようなことまで言う。唆すだけでなく、男にそんな覚悟がないことを見抜いた上で、そんな男を糾弾しているとも考えられるだろう。女は自身については、

どんな復讐でも受けやう。今朝のやうにそれを恐れて男の手から逃げやうと思ふやうな卑怯な事は決してしまい。復讐がくるまで私はぢつとしてゐる。さうして黙つて受ける。さうされた方が自分の立場が徹底して心持がいゝ。（傍線引用者。以下同じ）

と考える。「卑怯」にはなるまいと自分に徹底さを課すが、同時に女は相手の男にも徹底を要求する。二人の関係をいい加減に扱ったり、女に憐れみを請うたり、別れという対からの逃げを考えたりする男は「侮蔑」の対象なのである。そんな男は「卑怯」なのだ。一度殺すと言ったのなら殺せ、復讐をやり遂げて見せよ、お前も覚悟したらどうなのだ、と男に問いかけている。そして自分にはその覚悟があるということを男にまざまざと見せつけているのである。「殺せ」にはこれだけの意味が込められているのであり、女は何度も繰り返すこの言葉によっ

て男を追い詰めていくのである。

これと同様の女の心情は、他の作品でも見ることができる。「誓言」でも、男が「別れよう」と言い出したのに対して、女は「いや」だと言った上で、

「卑怯ぢやありませんか。ほんとに私を愛してゐるのなら、何故あなたは別れるひまに私を殺さないんです。あなたは私を遠のけておいて、さうしてまだ失くなりきらない愛を其の間に胡魔化さうとなさるんです。卑怯ぢやありませんか。あなたは何がこわいんです。私の何所がこわいんです。」

と、ここでは直接男を「卑怯」と罵る。身体を打ち据え合う争いをしても、男はいつも先に冷静さを取り戻して、一人争いから抜けようとする。先に土俵から降りてしまうのだ。そして世間体を気にして「くだらないぢやないか」と女をなだめる。こんな男の言動は女を「目の醒めた心地」にする。女も自分たちの争いを「くだらない」と思ったからでは決してない。「あの人の人格を云うものをはつきり目の前に露にされたやうな心持」になったからだ。これは「炮烙の刑」で「心がすつと冷めたく明らかに」なって男を「侮蔑」した心境と似たようなものだろう。自分が必死に格闘しようと思っていた相手が、それに値しない、つまりそれだけの気概を持ち合わせていない「卑怯」な人格の男だと分かってしまったのだ。だから女はもう一度男を「卑怯」と呼ぶ。「卑怯」な男とは、女との闘争から抜け出そうとする、対に執着しない男のことである。それは女からも逃げようとすることである。徹底して女にぶつかってこようとしない男のその不徹底さを女は非難しているのだ。

「炮烙の刑」のひと月前に発表された「寒椿」(『新潮』大正三・三)にも、男の「卑怯」を責める女の考えを見つけることができる。これは語り手である女の家に「相談でもあるらしく」やってきて自分の恋人に関する「愚痴を云つたゞけで」帰っていった男のことについて女が思うままに語るという作品である。この男は「苦しくつてたまらないから、誰かにこの苦しさを聞いてもらひたい」と女に言ったらしいのだが、それについて女は、

そんな卑屈な話があるでせうか。それほど苦しいなら、どし〳〵直接にその離れられない人に打つ突かつてゐらつしたらいゝぢやありませんか。あなたの成さることは、すべてが斯う卑怯なのです。あなたはその女を卑怯だと仰有つたが、これはあなたの態度の方が卑怯です。

「女を殺さうとさへ思つた。」

なんておそろしく凄い文句をおつしやつたけれど、そんなに思ひ詰めたあなたが、私のところへ来て、おしやべりなぞが出来ますものか。

と手厳しい。これは〈相剋〉物のどの女主人公にも、勿論作者にもある思いなのだろう。

「炮烙の刑」の三ヵ月後に発表された「奴隷」でも、言い争いの末、女に復讐することを宣言して家を出て行こうとする男に対して、女は「口先だけぢやないんでせうね」「復讐をする

と云ふ覚悟が消えないやうに、念を押して上げたんです」としつこく確認する。しかしここにはもう、男が「卑怯」から脱することは無理とみる女のあきらめが窺える。その無理なものをそれでも求め、男に突きつけたのが「炮烙の刑」という作品なのである。

このように、女は常に男に徹底と覚悟を求めている。「殺す」「復讐する」という言葉を文字通り遂行することを望んでいるわけではないが、言った言葉を徹底して成し遂げるくらいの気概を要求している。それはつまり、全身全霊で女とぶつかり合うこと、女との格闘に没頭することを意味する。闘争への本気での参加を、精神的にも肉体的にもお互いを乗り越え凌駕せんとする激しいせめぎ合いの中で、男女の究極の状態、〈相剋〉を作り上げていこうという意気を持つことを男にも望んでいるのだ。両者がその意気において共感できたとき、それが真正〈相剋〉を極める道へと二人が踏み出せたということであり、その道行きの相手となるに十分な資格を有する男を女は欲しているのだ。それ故に、それまでの「卑怯」さを払拭し、闘争から逃げ出さずに「汝が云つた通りに焼き殺してやる」と女に対峙した「炮烙の刑」結末部の男は正に女の渇望していた男の姿であり、だからこそ、そういう男が自分に与えられたことは「奇蹟」なのである。そしてその男を「どんな目にでも逢ひます。逢はしてごらんなさい」と受け止め、女は〈相剋〉を目指すのだ。

三、女が男に求めるもの

龍子が求めている男性像についてさらに考察する。〈相剋〉物の頂点「炮烙の刑」が何故に頂点と感じられるのか。男女の具体的な闘争場面の壮絶さを言うなら、「誓言」などの方がすさまじい。「炮烙の刑」では闘争シーンは冒頭以前、前の晩に済んでしまっている。闘争の原因に女の浮気という具体性が持たされ、テーマが強調された点があるにしても、それは設定の変奏とも見なし得る。決定的に他の〈相剋〉物と区別できるとすれば、女に「奇蹟」が起こった作品は「炮烙の刑」だけだという点であろう。それ以外の作品では、あきらめと頽廃の空気が後に漂うばかりであることを考えると、「炮烙の刑」は異色と言える。つまり、他の作品では結局、女は望むような男を得られなかったが、「炮烙の刑」では得られた、もしくは得られそうだと女が確信できたということである。女が望む男とは、先程述べたような、対から逃げずに女と共に〈相剋〉を築こうとする、つまり「卑怯」でない男ということだが、さらに女が望む男の性質について、他作品と比較して考えてみよう。

まず先に、龍子の性格・気質（決して思想ではない）について確認しよう。旅先に男を残して一人で東京へ帰ろうと決心した時、龍子には慶次の姿が「自分の何かしやうとする事を妨げる憎い影」のように見えた。男は女が先に帰ることを妨げるような仕草をしたわけでもなく、「然うした方がいゝ」と「逆らはなかつた」のにである。女のこの思いこみを、日頃の男から

の抑圧からくる被害妄想と考えるより、男＝〈女のすることを妨げる存在〉に女が仕立て上げていると捉えた方が良い。むしろ妨げる存在である男を欲しているのだ。自分に歯向かってくる相手がいてこそ自分の闘争願望が満たされる。妨げようとする男の意に背き、自分は男の意のままにならない女だと男に知らしめることの快感を女は期待している。やはり女は〈相剋〉を欲しているのだ。女自身はそうは言っていなくとも、本心はそうなのだ。女の言葉をそのままに受け取って、女の自我という観点でばかり見ていては不十分なのである。だから結末部で男の「殺気を含んだその眼」にぶつかったとき、「胸がずん〳〵と弾んで、血が荒く潮のやうに身内に動揺するほどその顔を見てゐることが恐しかつた」と殺されることの「恐怖」が書かれているが、これは半分嘘であると思わなければいけない。闘争を欲する血が〈相剋〉の予感に歓喜して全身を駆け巡っているのだ。

〈相剋〉物のこれまでの男たちは、女のそんな血を満足させられる男ではなかった。これは結末部を見ると分かる。「誓言」では、女は先刻までの男との闘争の気分を引きずり、一晩中悲しみに浸ったり反抗心をぶり返さしたりしながら悶々と男の帰りを待っていた。なのに男は翌朝「顔は湯にでも入浴ってきたやうに光りと綺麗な艶」を見せ、酒臭い息をしながら何事もなく帰って来て「お早う」とさわやかな朝の挨拶なぞしてみせる。男との格闘は女にとっては一大事、一晩中それに心を囚われるほどのことなのに、男にとってはその場限り、気分次第のものでしかない。過ぎ去ってしまえば何も残らないのだ。闘争に対する執着が男にはないのだ。この張り合いの無さ。こう考えると、過ぎ去れば何事もなく済ましてしまえるという訳にはいかないように、「炮烙の刑」では男が忘れ去ることができないような浮気という既成事実でもって女は来たるべき〈相剋〉に臨んだのではないか、という見方すらできる。男も執着せずにはいられないように、と。しかし「誓言」では女との争いは何でもないものにされてしまった。だから女は男と別れることを決心したのである。

「女作者」（『新潮』大正二・一）の結末部も見てみよう。先刻男が言った「君は駄目だよ」という言葉が胸に浮かび、女は反抗的な気分になる。「駄目な女なら何うなの」と「突つかゝつて遣り度い気」がして「何でもいゝから自分の感情を五本の指で掻きむしるやうな事がほしい。もつとあの男を怒らしてやらう」と考える。ここにも男に反抗することで自分を満足させようとする女の気質が見える。しかし相手の男の本質は次のようなものだ。

どれほど匂ひの濃かい潤ひを吹つかけて見ても、あの男の心は砥石のやうに何所かへその潤ひを直ぐに吸ひ込んでしまつて、さうして乾いた滑らかなおもてを見せるばかりである。

「私はあなたと別れますよ。」

斯う云へばあの男は、

「あゝ。」

と返事をするに違ひない。

「私は矢つ張りあなたが好きだ。」

と云へば、

「然うか。」

と返事をしてゐるやうな男なのである。自分の眼の前を過ぎる一とつ〳〵に対しても、自分の心の内に浸み込んでくる一人々々の感情でも、この男は自分と云ふものゝ上からすべてを辷らせて了つて平気でゐる。この男の身體のなかはおが屑が入つて入るのである。生の一とつ一とつを流し込み食へ込むやうな血の脈は切れてゐるのである。女作者は然う思ふと、わざわざ下へおりて行つて自分の相手にするのもつまらない気がした。（傍点作者）

格闘しようと女がどんなに男に働きかけても何も返ってこない。闘争しているかに見えても、女の反抗に対して反作用の力が反射的に出ているだけであって、そこに男の魂も血の通いもない。突きつけた女の思いは「おが屑」のような男の中でそのまま男に何の影響も与えないままに吸収、拡散され、しまいには消滅してしまう。それに応じた反応がないのである。男には女への未練や意地のようなものはあっても、闘争への執着、心意気がないのだ。そんな〈「おが屑」男〉ばかりなのだ。

〈相剋〉物の女は「おが屑」でない男を渇望している。だからこそ、「炮烙の刑」の結末は、男が〈「おが屑」男〉から脱したことを表しており、そのような男がとうとう自分に与えられたことが女の目には「奇蹟」と映るのであった。これでようやく念願であった男との〈相剋〉の共有ができるのである。真正〈相剋〉への道を男と対で踏み出せた。闘争という快楽への期待に女の血は躍っている。「炮烙の刑」は唯一、女と男が〈相剋〉に向かう思いをも共有できた「奇蹟」の物語なのである。

おわりに

以上のように結末部の「奇蹟」を捉えると、作品の前半から後半部に至るまでの何度も繰り返される男女のすれ違い、埋まらない溝、愛や夫婦関係に関する志向の対極性、男女の非対称性などは全て、女がこの「奇蹟」を手に入れる為のものに見える。闘争するのが決定的な存在として、闘争以外の方向には向かいようがない程までにずれ、正反対の方向を向く男女が描かれているのだ。しかし男女は、ずれが修正されず、相互に理解し合えないという理由で闘争してしまうのではない。格闘は已むを得ずするのではない。女は男と正面衝突の格闘をするために、敢えてずれを生み出し増幅していたのだ。全ては真の〈相剋〉を迎えるための、作者による、そして女主人公によるお膳立てであったのだ。なぜなら、〈相剋〉状態にいるという認識以外に、これから夫婦が共有できそうなものなど、もはや無いからである。〈相剋〉のみが女に「幸福」を与えうるからである。

〈相剋〉とは単なる男女の争いではない。はじめに「炮烙の刑」が冒頭以前と結末以後の二度の修羅場に挟まれた構造をし

ていることに触れたが、この二つの修羅場は質的には全く異なる。冒頭のものは、男に関しては浮気をされた側の意地と憎悪からくる女への詰りに過ぎず、女でさえも自己主張をしてみる程度の単なる反抗であった。お互い、闘争への覚悟を決めてのものではなかった。女の浮気という具体的な争いの発端が持ち込まれたにしても、それまでの〈相剋〉物と同程度の、所詮はその場限りの気まぐれの争いと大差ないものであった。〈相剋〉とは程遠い。

しかし、皮肉にも男が「卑怯」で情けない人格を見せたことにより、女の中に、闘争の気概と格闘することそのものへの志向がはっきりと形をもってあらわれた。自分の真に欲するものが見えてきた。女の願望は男の抑圧や結婚制度からの自己解放だけではない。個としての自由の希求よりむしろ、その自由は当然のものとして確保しながらの男女対としての束縛関係の昇華を求めていたのだ。本当に欲しかったのは、くんずほつれつ、がんじがらめの緊縛した一対一の対の中で行う、お互いをぶつけ合って相手を凌駕しようとする格闘だったのだ。女にとっては、ぶつけるというくらいでは物足りないかもしれない。相手を食い尽くし、人格まるごと我が物にするくらいの意気だろう。自身の全人格を賭けて相手の全人格と格闘したいのだ。そして、男にも自分と同質の格闘への気概を持ってもらいたいのだ。そうなって初めて、女が求めてやまない極限状態の男女関係になれる。これこそが〈相剋〉なのである。

そして、とうとう男が女を受けて自分も格闘する覚悟を決めたときに二人が突入する修羅場こそ、〈相剋〉の世界への入口であった。正確に言うと、男女が結末で共有できたのは〈相剋〉そのものではない。その入口を自分たちが正に自らの意志で入ろうとしているという認識とその意気を分かち合えたのである。それだけでも女の眼には「奇蹟」と映ったのである。

「奇蹟」とは、〈相剋〉をもたらすべく女に「炮烙の刑」が与えられようとしたことであった。女の壮絶な格闘への意気に相応しい気概で男が女に立ち向かってくることであった。女を火炙りの刑に処するとき、女だけでなく火を持つ男も同時に一つの炎に包まれ、炙られて、お互いの情念に身を焦がすことだろう。その炎が永久には続かないことが分かっているからこそ、女は「冷嘲的」にもなってしまうのだが、それでも一刹那、女の願望通りに、男女が闘争への意志を共有できた。これが主人公龍子にとってはこの上もない「奇蹟」だったのである。

(註)

(1) 長谷川啓「解題」『田村俊子作品集』第2巻、オリジン出版センター、一九八八・九

(2) 鈴木正和「田村俊子『炮烙の刑』論―〈個〉への希求―」『日本文学論集』(16) 大東文化大、一九九二・三

(3) 例えばいてう(「田村俊子氏の『炮烙の刑』の龍子に就いて」『青鞜』大正三・六)は「作全体として内的に統一されたどつしりとして動かぬ或ものの響がちつとも心に迫つて来ない」「思ひ上つてゐる作者の態度」「作者

の作中の人物に対する内省の不足」、女主人公は新しい婦人としては「随分不徹底」と手厳しい。他にも、思想が不徹底とする水野盈太郎「田村俊子女史に送る書」（『文章世界』大正三・七）など、女主人公や作に臨む俊子を態度として「無自覚」「不徹底」とみる論者が多い。また、ある程度評価しつつもまだ旧道徳から脱しきれていないとみる岩野泡鳴「まだ野暮臭い田村女史」・岩野清「私の考へてゐる田村俊子氏」（共に『中央公論』大正三・八）などがある。これらの批判は、基本的に主人公を自由恋愛を求め自我を主張する女と捉えている為に、〈新しい女〉としては追求不足だと感じられるのであろう。

（4）（3）に同じ。

（5）（2）に同じ。

（6）野上弥生子「俊子氏に就て描く私の幻影」『中央公論』特集田村俊子論、大正三・八

（7）光石亜由美「〈女作者〉が性を描くとき―田村俊子の場合―」『名古屋近代文学研究』（14）、一九九六・十二

※テクストの引用は、「魔」「誓言」「女作者」「炮烙の刑」は『田村俊子作品集』（オリジン出版センター）に、「寒椿」「奴隷」は初出に拠った。

（たかたはるみ／本学大学院博士課程）